
傷は元通りにならない

一文字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷は元通りにならない

【Nコード】

N4407D

【作者名】

一文字

【あらすじ】

幼い頃交通事故で右腕に傷を負った少年と、少女のお話。

小学3年

傷は元通りになる。よく言われるが、これは嘘だ。

僕の右腕には手の甲から肘にかけて縫い痕が残っている。幼い頃車に轢かれた時にできた傷で、両親はその傷を切り裂くと言うより決るに近かった、と言っている。僕が覚えているのは、救急車の中で必死に呼びかけてくれる隊員の顔だけだ。

運がよかったのか治療がよかったのか、後遺症が残る事なく傷は完治した。右腕の外側に、いびつに伸びる縫い痕を残して。

この傷のせいで、小学校の頃はいじめられたりもした。普段はなるべく長袖を着るようにしていた。だから嫌いな季節は夏で、嫌いな科目は体育だった。

特にプールなんて見世物小屋に閉じ込められたようなものだった。子供特有の無遠慮な視線、直接的な言葉。

ねえその傷どうしたの？うわーフランケンシュタインみたい、あいつ人造人間なんだぜ、あつちいけよ化け物…。

それは今思えばどうという事はない、ひどくありふれた嫌がらせだったのだけど、当時の僕はそれが嫌でたまらなかった。

僕の学年は1学年で3クラスあって、3年生と5年生になる時にクラス替えをした。だから3年生の最初、半分以上は直接知らない子になったクラスには、どこかよそよそしい雰囲気流れていた。最初は彼女もそんな知らない子の中の一人だった。

よく晴れた夏の日。体育の授業はもちろん水泳だった。去年とは違う子の中で受ける初めての水泳は、去年より人目を集めた。今までと同じような事を今までと違う子に言われ、それでも傷ついた素振りを見せずに振舞った。

彼女に話しかけられたのはその体育の時間が終わり、着替えを済ま

せて教室へ戻る途中だった。

後ろから追いついてきた彼女は僕の右側に並んで歩きながら、その傷どうしたの？と聞いてきた。内心ではまた何か酷い事を言われるのではないかとびくびくしながら、それでもそんな事は表に出さずに、そんな昔の事はもう大丈夫だよとアピールするように笑顔すら浮かべて僕はこの傷ができた時の事を話した。

彼女は僕の話が終わった後「触ってもいい？」と言った。僕は驚いたけれど、いいよと答えて右腕を彼女の方へ伸ばす。指先で腕の縫い後をなぞられる感覚にくすぐったさと恥ずかしさを覚えたけれど、真剣な彼女の顔を見ると腕をおろすことは出来なかった。

手首側から一往復して、彼女は指を離した。そして痛かったでしょと言ったあと、「でも、私その傷好きよ。なんか稲妻みたいでカッコいいと思わない？」笑顔でそんな事を言って教室へと走っていった。

一瞬何を言われたのか解らなかった僕はその場に立ち尽くしていた。傷を見て蔑むでも同情するでもなく、認めてくれたのは彼女が始めてだった。

それから僕は腕の傷をあまり隠さなくなった。クラスメートから何か言われても以前ほど気にならなくなった。友達も増えて、夏も嫌いではなくなった。小学校5年生の時に行われた最後のクラス替えで、僕はもう一度彼女と同じクラスになった。

小学6年

小学校6年生の行事の中に林間学校があった。夏休みに入って最初の3日間を山で過ごすという小学校最後のイベントで、みんなとても楽しみにしていた。1つのクラスは男女3人ずつのグループに分かれて、行動はグループ単位で行った。僕は幸運にも仲のいい友達と、さらに幸運なことに彼女と同じグループになった。昼間は登山をした。夕食にカレーを作った。

当然それ以外の寝るときや風呂の時間はグループではなく男女別に行動する事になる。そして2日目の夜。つまり、帰る日の前日の夜。学校の宿泊行事の常として、幾人かの女子が男子の部屋に、幾人かの男子は女子の部屋に遊びに行っていた。

僕は仲のよかった友達と部屋に残っていた。一応先生には部屋を出てはいけなと言われているし、僕たちの部屋にやってきた女子の中に彼女がいた事も理由だった。教室の半分程度の広さの部屋に男女合わせて16人の子供が集まって、おしゃべりをしていた。

消灯時間は過ぎているから電気をつけるわけにはいかなかった。それでも大きな窓から入ってくる月明かりで、部屋の中は十分に明るかった。普段では決して目にする事の無いお互いのパジャマ姿と、もうそこに迫っている卒業という事実と、電気をつけなくてもお互いの顔が分かるほど部屋に満ちた月明かりで、僕達はお互いが普段に無いほど饒舌だった。

どう話しが転がったのかはよく覚えていないが、今から肝試しをしよう、ということになった。僕たちがいた部屋は1階にあって、窓の外には木々が生い茂る暗い森が見えた。その森の中をまっすぐ歩いていくと昼間山登りに使った道路に出て、その道を少し登ると小さい祠があった。そこまで行って自分達の名前の書いた紙を置いてくる、という単純なものだった。

当然男女2人のペアに分かれていく事になり、誰と誰がペアになる

か少し揉めた。誰と行きたいかなんて、それぞれ心の中ではちゃんと決まっているけれど、小学校6年生の僕たちにはそれを口に出す勇氣は無かった。結局男子は男子のリーダーに、女子は女子のリーダーにそれぞれの希望を言つて、最後にリーダー同士が相談して決める事になった。男子8人は車座を作り額をくつつけ、お互いを探り合うような視線を交わす。「お前が先に言えよ」「なんでだよ、そういうお前が言えつて」そういう小競り合いがちらほら聞こえた。誰もが誰かの出方を伺つていて、最初の一人の言葉を待つていた。そうして具体的な名前が出ずに時間だけが過ぎていき、痺れを切らしたリーダーが「先に名前を言つた奴を優先させる」と言つと少しだけ動揺が広がつた。

暗い森の中を彼女と手をつないで歩く自分以外の誰かを想像したとき、僕は反射的に彼女の名前を口にしていた。みんなの視線が僕に集まつた。リーダーを含め幾人かはへえ、という顔をして、幾人かは少しシヨックを受けた顔をしていたように思う。僕のその発言を受けて他の子もぱらぱらと女の子の名前を言い始めた。「今いるヤツらの中では」とか「本当は嫌なんだけど」とかそういういい訳をする子もいたが、その顔は月明かりの下でもよくわかるほど赤くなつていた。女子はとつくにみんなの意見を聞き終わつていて、こういうときに男子はダメね、なんて文句を言つていた。

男女のリーダーは僕達から少し離れた所に紙とペンを持って行き、小声でペアを決めている。その様子を男子と女子の一団が、期待と不安に満ちた目で見つめていた。リーダー同士も少し揉めて、ようやくペアが決まつた。僕の相手は、彼女だった。

僕達は何番目に出発したかは覚えていない。ただ、目があった時に浮かべていた彼女の恥ずかしそうな笑顔とか、みんなが見ている前では意識して繋がなかつた手とか、サンダルを履いて歩くと夜露で足がしつとりとぬれる感じとか、森の中のひんやりとした空気とか、そういう事は覚えている。

部屋から抜け出して歩き出す時、僕が彼女より一步先を歩いていた。月明かりの届かない森の中に入っていく時は一瞬ためらった。それでも後ろからついてきている彼女や、窓から見ているだろうクラスメートに怯えている様子は見せたくなかった。いくつもの視線から逃げるように、思い切って森の中へ入って行った。

そうして少し進んだ時、後ろから僕を呼ぶ声が聞こえた。彼女の声だった。僕だけ先に行ってしまうから、彼女とはぐれてしまった。少し落ち着いて辺りを見渡して、周囲の暗さに改めて驚いた。暗闇の中に幾筋かの月明かりが差し込んでいて、明かりのあたる場所と当たらない場所ではっきりと境界線ができていた。そんな中、弱々しく僕を呼ぶ声を頼りに彼女の方へ歩いていった。

何歩目かで、突然目の前に彼女が現れた。そこはちょうど木々の隙間から月明かりが入ってくる場所で、彼女は目に涙を浮かべていた。その時何か言葉を交わしたはずだけど、それも覚えていない。ただ、彼女を泣かせてしまった事にショックを受けた僕は、謝りながらごく自然に彼女の手を取っていた。暗闇に目がなれるまで、僕達はそうして手をつないだまま佇んでいた。

木々の輪郭がぼんやりと分かるようになってから、手を繋いで僕達は歩き始めた。視界はよくなったけれどゆっくりと歩いた。右手に伝わる彼女のやわらかい感覚とか、暖かさとか、そういうものをいつまでも感じていたいと思った。やがて道路に出て祠に着いて、僕達の名前を書いた紙をそこに置く時に、少しためらいながら僕達はお互いの手を離して、そして帰るときには少し照れながら、お互いの手を繋いだ。その途中での会話は覚えていない。ただ一つ、彼女が僕の右腕の傷をみて、「月明かりに照らされて、まるで浮かび上がってるみたいでキレイだね」と言ってくれたこと以外は。

今考えると、いろいろな事に気がつく。

部屋を抜け出す事なんて絶対にばれていたはずなのに何も言わなかった先生への感謝。最後まで自分の希望は口にしなかったリーダー

の相手は誰だったのか。手を離すことなく部屋まで戻った僕達を、
どうして友達は冷やかさなかったのか。僕達の後の何組かは僕達と
同じように手を繋いで部屋まで戻ってきて、またそれ以外の何組は
女子や、時として男子が泣きそうな顔をしていたのは、肝試しが怖
かっただけなのか、とか。

その出来事は全て夢だったのではないかとも思えてしまう。僕たち
の部屋にみんなが集まる場面や、あの肝試しの後の出来事は、まっ
たく覚えていない。

でも月光の下で見た彼女の泣きそうな顔や、初めて繋いだ手の感覚
は、今もはつきりと思い出すことができる。それだけは、忘れるこ
とはないだろう。

中学1年

小学校を卒業して、僕達は同じ公立の中学に進んだ。同じ地域にあるほかの小学校からもたくさんの子がこの中学校に入学してきた。1学年で5クラスもあった。

林間学校の後、彼女とはよく話す程度には仲良くなったけれど、それ以上の事は無かった。中学では彼女と違うクラスになってしまったけれど、それを残念がる暇は無かった。新しい友達を作ったり、部活に入ったり、初めての定期テストを受けたりして毎日を忙しく過ごしていた。廊下ですれ違えば挨拶はするけど、僕の方から積極的に、あるいは彼女のほうから積極的に話しかけるようなことは無かった。

僕は空手部に入部した。今考えてもその理由がよくわからない。ただ、右腕の傷を稲妻みたいだね、と言ってくれた彼女の言葉から何かひらめくところがあったのかもしれない。もしくは、柔道部なら坊主頭だけど空手部なら髪型は自由だ、という理由だったかもしれない。

一応は型、つまり演舞に重きを置いていたが、そこは中学生の空手部だ。顧問が見ていない隙、あるいはごく稀にある試合なんかはほとんどケンカだった。

彼女と二人だけで会ったのは、入学してから半年後の9月だった。その日僕は部活の片付けに手間取って、学校を出たのは午後7時を回っていた。残暑が残る時期で僕は半袖のワイシャツを着ていた。夕方もうすぐ終わる、空の色が深い赤色から藍色へと変わる時間帯。学校からの帰り道の途中に公園があった。住宅街の中にあつて、昼間は子供をつれた母親でにぎわう場所だがこの時間はさすがにだれもいない、はずだった。そこに、彼女がいた。

一人で公園のベンチに座って、うつむいている。僕はこのまま通り過ぎてもよかったのだけれど、結局公園の中へと足を向けた。彼女は最初、誰かと思って驚いた素振りを見せたが僕だと分かると微笑んでくれた。

何をしているのか、と僕がたずねると曖昧に笑ってちよつとね、と答える。そして、ちよつと話をしていかない？と言われた。

隣に座って彼女の話の話を聞くと、それは中学生の女の子によくある友達関係の悩みらしかった。ぽつぽつと話す彼女に相槌を打ちながら、僕はその横顔にドキドキしていた。会話の内容よりも今こうして二人だけにいるという事が、すぐ隣に、手を伸ばせば触れられる距離に彼女がいるということが僕を緊張させていて、会話の中身はほとんど聞いていなかった。

だから「私はダメなんだよ」という彼女の言葉に「そんなことない」と答えたのは、ほとんど反射条件のようなものだった。つられて僕は、小学校3年生の時の事を話した。いつもからかわれるだけだった右腕の傷を褒めてくれたこと、それがどれだけ僕を励ましてくれたか。腕の傷でどれだけつらい思いをしてきたかを他人に話すのは、この時が初めてだった。

僕が話し終わった時、空にはきれいな満月がかかっている、公園の中は外灯がいらなくらい明るかった。まるであの夜のようにだ、と思った。彼女もそう思ったのだろう、話は自然と林間学校の事へと移っていった。集合に遅刻してきた友達、山登りで見た花畑、不ぞろいなジャガイモの入ったカレー。そして、肝試し。

「あの時、男子と女子で別れて誰とペアを組みたいか希望を取ったでしょ？誰と組みたいって言ったの？」彼女は笑顔でそう聞いてきた。

思わず答えに詰まり空を見上げる。雲ひとつない空には本当に綺麗な月が浮かんでいて、涼しい風が僕の腕を撫でた。その瞬間、僕の心はあの肝試しの夜に戻っていた。だからさつきまで感じていた緊張は消えて、特に気負うこともなく、自然と彼女の名前を口にする

ことができた。

彼女は少し驚いたような顔をした。そして一度うつむいて「実は私が組みたかった相手も君だったんだよ」と言った。

それに何と答えればいいのか迷っている間に、彼女は椅子から立ち上がってそろそろ帰ろう、と歩き出した。僕もそれに続いて歩き出す。その時僕たちの間には、あの深夜の森の中と似た空気が流れていた。手を伸ばせば彼女の手をつかめるのに、中学生になった僕にはそれができなかった。

不意に外灯の下で彼女が立ち止まる。

「今でも誰かとペアを組むなら、私の名前を書いてくれる？」静かに、少し緊張した声でそう聞いてきた。僕はそれに、今度は迷うことなく、今でも君の名前を書くよ、と答えた。

振り向いた彼女は嬉しそうに、目には少し涙が浮いていたと思う。ありがとう、私も絶対あなたの名前を書く。彼女がそう言ったあと、僕は抱きしめあった。僕は彼女の体温や、髪の毛から漂うシャンプーの匂いや、呼吸の音を感じていた。それは手を繋いだときとは比べ物にならないくらい、彼女の存在そのものだった。

学校の中では僕達は普通に振舞った。周囲の友達に言いふらすようなこともしなかった。ただ、肝試しの時にいた友達の間では僕達はほぼ『確定』しているらしかった。

休日にはデートのような事もした。少ないお小遣いの中から、何とか彼女と出かけるためのお金を集めた。といっても、中学生だった僕にはあまり大きなお金は出せない。遠出もできないときは自転車で二人に乗って、色々な場所に行った。少し遠くの公園や、水族館にも行った。お金があるときは電車で街に行つて、ウィンドウショッピングをしたりもした。

部活も続けた。自分では自覚がなかったが、両親が言うには僕は中学で体が一回り以上大きくなったらしい。部活と勉強を両立させて彼女とも仲良く過ごした。そうして、とても充実した時期が過ぎて

いった。

今振り返っても、僕の人生でその時以上に充実していた時期はない。

中学2年

僕たちが中学2年になった年。僕は大きな怪我をした。

その日の放課後、僕はいつもものように部活へ行った。道場に顧問の先生が来るのはいつも遅くなってからだから、早い時間は何をやっても平気だった。仲のいい友だちと一緒に、準備体操と試合の間のようなことをやっていると突然「なあ、お前アイツとどうなってるの?」そう聞いてきたのは、違うクラスのあまり親しくない男子だった。彼が言うアイツとは彼女の事で、どうなってるのとは僕と彼女の関係の事だと分かった。その発言からは下品な興味しか感じられなかった。それに僕が何と答えたのかは覚えていない。ただ、「なんでもないよ」とか「かんけないよ」などの彼の興味を満足させるような言葉ではなかったはずだ。だからその後彼は「なんでもないわけないだろ」「みんなお前たちのこと噂してるぜ」「この間も一緒にいるところ見たってやつがいるしよ」「僕にまわりついて離れなかった。そんな質問に答えるのが面倒だったし、なによりに答えたく無かった。適当にあしらっていると、あまりに僕のいい加減な受け答えにだんだん彼も調子に乗ってきたようだった。

「なんだよ、そんなに否定ばかりしてるって事は知られたくない秘密でもあるのか。ああ、実はお前らもうヤツちゃったとか?」中学生の男子なのだから話がそういう方向に流れていく事は当然とも言えるが、その発言を聞いた時、僕は面倒という感情をはるかに超える怒りを感じた。それは突然自分の中に現れて、とてもコントロールなんてできそうにないほどの強い感情だった。

それを悟られまいと僕は「そんなわけないだろ」などと答えながら彼に背を向けた。そのまま道場を出てどこかで落ち着こうと思ったのだ。けどそんな僕に彼は「嘘だろ、絶対やってるよ。どうだったんだよ、アイツもやっぱ声だすわけ? アア、とか、もつと、とか」そういいながら彼はどうもあえぎ声の真似事をしたようだ。周りに

いた部活の友達もそんな彼をみて、馬鹿だなと笑っていたらしい。『ようだ』や『らしい』をつけるのは、その時の様子をあまり覚えていないからだ。彼が口にした言葉が彼女のことを指していると理解したとき、自然と僕は怒りを抑えようとするのをやめた。ゆっくりと振り返って、後で聞いた話ではうつすらと笑みを浮かべながら、僕は生まれて初めて全力で他人の顔を殴った。それは1年かけて体に覚えこませた空手の突きではなく、まるでピッチャーがボールを投げるときのような、そんなパンチだったらしい。僕の拳は油断していた相手の顔を正面から捉え、相手はそのまま後ろに倒れた。そこから断続的な記憶が続く。無様にひっくり返る相手。素手で殴った右手に走る熱。その相手にさらに詰め寄ろうとする自分。それを必死に止める周囲の友達。その手を片っ端から振り解いて相手との距離を詰める。相手の鼻を押さえた手の隙間からこぼれる血、僕を見上げる怯えた目。それでも収まらない怒り。血に染まりつつある相手の道着の胸倉を掴み、今度は左頬を殴る。そこで後ろから羽交い絞めにされて相手から引き離される。僕と彼の間にも何人かが割ってはいる。

そこで僕は我に返った。まだ全身が熱いけれど、道場でうずくまり道着を血まみれにした相手と、「おい、誰か先生呼んで来い!」「待て、それくらいにしとけよ!」「やべえぞ、鼻血がとまらない!」「落ちて着けて!」「保健室つれてくぞ、2年手を貸せ!」「周囲の叫び声を聞いて頭は冷静になっていった。彼はそのまま数人に抱えられるようにして保健室へ運ばれていった。顧問の先生も来て、周囲の友だちに何が起きたのか聞いていた。そして最後に僕のところへと来た。きつとどうしてこんなことをしたのか、と聞こうとしたのだろう。けれどもその直前に、僕を後ろから羽交い絞めにした先輩が「おい、おまえ右手大丈夫か!？」と声を上げた。

自分の右手を見ると全体が青紫色に腫れ上がっていて、感覚はまるでなかった。指一本動かせない代わりに、全く痛みも感じなかった。

結局彼は鼻骨と左頬の骨折、僕は右手中指と人差し指と手の甲を骨折して、手首の筋を痛めた。

これも後で聞いた話だが、一発目の後3人が僕を取り押さえようとしたが、それを振りほどいた僕の手際は見事で、さらに相当物騒な事を口走っていたらしい。それは普段の僕からはとても想像できないような言葉ばかりで周囲の友達はとても驚いたそう。僕は僕が何を言ったのかにはあまり興味が無かったけれど、仲のいい友達はその時の言葉を一つだけ教えてくれた。僕は「それ以上あいつの事言ったらぶつ殺すぞ」と、大声で怒鳴ったそう。

この事件は学校中に知れ渡り、僕は一時有名人になった。そしてどうして僕がそんな事を、具体的には知人の鼻骨と自分の右手の骨を折ったのか、その理由も学校中に知れ渡ったはずだ。すれ違う生徒はまず右手にまかれた包帯を見てから僕を見て、そしてあざ笑うような顔をする者もいたし、逆に尊敬とも感動ともつかない顔をする者もいた。顔も名前も知らない下級生の女の子に「頑張ってください！」なんていわれたこともある。

当然それは彼女の耳にも入っていたはずだった。だから僕は少しの間、なるべく彼女と会わないようにした。きっとそれは彼女も同じだったはずだ。お互いがお互いに会わないように気をつけた。

そんな時、一度だけ階段で彼女とすれ違ったことがある。僕は友達と喋りながら階段を上がっていて、彼女は友達と喋りながら階段を下りてくるところだった。お互いがまるで友達との会話に夢中で気がつかなかった、という様子を装ってすれ違った。それでもその時に心に穴が開いたような、やりきれない悲しみを強く感じた。気を紛らわす為に右手を握ったけれど、やっぱり痛いだけだった。

最初は不便の連続だった。右手を使う事、文字を書いたり物を食べたり、そういったことは全て左手を使った。おかげで僕は今でも左

手で箸を使える。風呂に入って体を洗うのも、着替えも、最初はとも時間がかかった。だけど人は慣れるもので、数ヶ月したらストレスを感じなくなるほどには、毎日の生活を過ごせるようになった。そうなつてから、僕はあの事件のあと初めて彼女と二人だけで会った。休日の昼間、少し離れた街で待ち合わせをした。

時間より少し前に待ち合わせ場所に行くと、すでにそこには彼女がいた。遠目でも僕には、彼女が少し緊張しているのが分かった。近づいていくと彼女は僕に気がついて、嬉しそうな、そして少し悲しそうな顔をした。

昼食のために入ったファーストフード店で向かい合つて座つたとき、ごめんねと彼女は僕に謝つた。何の前置きも無かつたけれどそれが僕の右手の事だと分かつた。こんなの平気だ、今じゃ特に不自由もなく生活できるようになつたと、むしろおどけたように僕は言つた。そうして今度は彼女は嬉しそうに、泣きそうな顔をして、ありがとうと言つた。それから「大丈夫、傷は元通りに治るから」そう言つてくれた。

それから数ヶ月が過ぎて、僕の右手は完治した。病院へ行つて包帯をほどいて医者から完治の告知を受けて、僕は違和感の残る右手の感覚を楽しんでいた。長い間使わなかつた右手はすっかり細くなつてしまい、しばらくはリハビリをする必要があると医者から言われた。

彼女はとても喜んでくれた。お祝いと言つて、コンビニで小さなケーキを買つて二人で食べた。元通りに治つたでしよう？という彼女に僕は首を横にふる。元通りじゃない、すっかり弱くなつちやつたよ、と。右手と左手は同じ人についているというには不自然なほどすつかり違つていた。長い間包帯に包まれていた右手は細くて、真っ白だつた。そんな白い骨のような腕に、まるで僕の腕だという目印のように残る傷跡を指して僕は、傷は元通りにはならないんだ、という。悲しそうな顔をする彼女に僕は笑顔で、でも大丈夫、これからリハビリをして絶対に元に戻すから。と、そう言つた。

君が言った「傷は元通りに治る」という言葉を嘘にはしない、と
強く思った。

中学3年

翌年の春、僕達は中学3年になった。そろそろ具体的に見えてきた受験というプレッシャーにつぶされないように、僕たちはお互いを支えあっていた。それでも夏が過ぎて秋になり、冬が目前に迫ると僕達はどうしても相手のことを考える余裕がなくなっていた。それは僕たちの志望校が違っていた事も理由だったかもしれない。お互いがお互いの思いやりのなさを責めた。昔ならすぐに仲直りするような些細な事をいつまでも引きずるようになり、それが原因で次のケンカが起きるようになった。

やがて彼女との関係は僕にとって居心地がいいものではなくなっていった。今までのように頻繁に連絡を取る事もなくなり、休日は勉強をして過ごした。それでもふとした時に彼女のことを考えて、声が聞きたい衝動に駆られたりもした。僕たちの関係があまりいい状態ではない事を分かっていながら、それをどうにかしたいと思いつながら、どうする事もできなかった。

そんな気持ちのまま僕は冬を過ごし、受験本番を迎えた。

彼女は志望校に合格した。

僕は志望校には行けなかった。

それが、決定的だった。

今なら分かる。僕が志望校に合格できなくて、彼女は一人では喜べなかつたはずだ。だけどその時の僕にはそれが理解できなかった。彼女から電話があつた。私合格したよ、どうだった？嬉しそうな声が受話器から聞こえる。僕が聞いたかつた声、だけどこの時は、一番聞きたくない声だった。僕が一瞬答えに詰まったことで彼女も事態を察したらしい。僕は、まだ第一志望があるから、と誰が聞いても強がりだと分かる声で強がりを言った。彼女も、そうだねまだ大丈夫だよ、と言って電話は切れた。

僕は、第一志望も合格できないような自分は彼女に不釣り合いじゃないのかと思うようになった。第一志望も合格できないような自分を彼女はあざ笑っているのではないかと考えるようになった。

結局僕は第二志望の高校に受かった。彼女と会ったのはそれから数週間後のことだった。

受験が終わってから卒業式までのわずかな間、3年生は登校が半ば自主的になる。だから僕達は平日の昼間に学校の外で会う事にした。待ち合わせ場所は住宅街の中にあるあの公園。その日は冬の張り詰めた空気がだんだんと春のそれに変わる、新しい生活に期待を弾ませるような、暖かく穏やかに晴れた日だった。

僕の前に現れた彼女は少し服装が変わっていて、大人っぽくなった印象を受けた。うっすらとしている化粧のせいだったのかもしれない。それは彼女が僕に見せたくて頑張ったのだからうけれども、その時の僕には全く違う意味に見えた。

僕を残して彼女は違う世界へ行ってしまう。自分の手で掴んだ、自分の望んだ未来の中で、どんどん大人になっていく。そう、僕の事など忘れて。

きっかけはよく覚えていないけれど、多分、酷く自分勝手な、彼女に対する言いがかりだったはずだ。例えば、彼女が初めて誰かのためにした化粧を、酷くけなすような事を言ったとか。とにかく僕達はかつてないほどのケンカになった。僕が放つ一言がどれほど彼女を傷つけているか分かっていたいながら、その一言がどれほど自分勝手なことか分かっていたいながら、

化粧なんてして、全然似合っていない。

第一志望に受かった奴はいいよな。

早く高校行きたくて仕方ないだろ。

その言葉の一つ一つが全く彼女を信頼していない証拠だった。僕たちの間に流れていた時間や想いを、僕は自分の言葉で壊していた。それに僕自身も傷つきながら、それでも言葉を止められなかった。そして、ついに言っではいけない事を言ってしまった。

「早く高校に行つて、お前に似合う新しい男を見つけなければいいだろ！」

その時の顔を僕は忘れない。彼女は目に涙を浮かべたまま、表情を凍りつかせた。まるで次の瞬間には粉々になつてしまふようなガラ又細工を思わせる顔だった。そして粉々になる代わりに黙つて公園から走り去つていき、その後ろ姿を僕は何も考えられない頭でぼんやりと見つめていた。

それは部活で事件を起こした直後のような、酷く非現実的な感覚だった。あの事件を今でも決して後悔しないのと同じくらい、僕はこの公園の出来事を後悔している。

数日後に行われた卒業式で、校長先生の最後の話を聞いている時も、式が終わつてもう二度と生徒としてこの学校に来る事はないと実感している時も、彼女は僕を見なかった。だから僕にとって卒業式は意味を持っていない。

卒業が何かからの別れを意味するのなら、あの公園の出来事こそが僕にとっての中学生活からの卒業だった。

それ以来、彼女とは会っていない。

中学3年（後書き）

次回、最終話です。

今日

ベッドの上に一人寝そべっている。

さっきまで降っていた土砂降りの夕立は上がって、空はきれいな夕焼けに染まり、遠くからヒグラシの声が聞こえる。今夜にかけて天気が崩れる心配はなさそうだと、つけっぱなしのラジオが伝えている。夏真っ最中の8月中盤。カーテンを揺らす風も湿気を帯びている。

僕が中学校の同窓会の知らせを受け取ったのは2週間ほど前だ。卒業して10年目の記念、だそうだ。彼女と最後に会ってからそんな時間が過ぎているという実感はまるでない。

僕は第一志望の高校に進学できなかった。だけど僕の高校生活はとても充実していた。いい友達に会えた。尊敬できる先生にも会えた。馬鹿な事もやって、周りに迷惑もかけた。空手はずっと続けて、全日本大会にも出場した。決め技はいつも右の正拳突きだった。中学時代の犬吠我を乗り越えて僕の右手は強くなっていた。

誰か女の子を好きになり、付き合ったりもした。だけど誰も長続きしなかった。誰に対しても、ある一線以上踏み込めなかった。気持ちを含めれば込めるほど、離れるとき辛くなる。別れはどんなに拒んでも、どんなに信じられなくても、信じられないほどあっけなく訪れることを僕はよく知っていた。それに、どうしても目の前の女の子の向こうに彼女の姿が、あのよく晴れた公園で酷く傷つけてしまった時の泣き顔が見えた。

付き合って数ヶ月経つと相手の子は「あなたは私をみてくれないのね」「どうして信用してくれないの?」「他に気になる子がいるんでしょ?」などと言って僕から離れていった。困ったことに、彼女たちが言う別れ際の言葉全てが正解だった。

そうやって僕は、誰かを傷つけて誰かに傷つけられながら高校生活

を過ごしていった。

大学は、自分の望んだ学校へいった。

それで心に余裕が生まれたからか、それとも大学という区切りがついた事でいつまでも中学の思い出を引きずっていても仕方ないと割り切れたからか。高校のときからは考えられないほど素直に、僕は他人と接することができた。

飲み会で「いままで恋愛でつらい経験をしたことはある？」と聞かれたときに、中学3年の彼女との別れの様子を語る事もできた。それを聞いてきた子と付き合い始めて3年になる。

今僕が好きな人を素直に好きでいられる事、その向こう側に中学生の彼女の泣き顔を見なくなった事で僕は、中学3年にできた心の傷が癒えたことに気がついた。

ベッドの上に一人寝そべっている。空の色は深い赤色から藍色へと変わろうとしていた。

あと数時間後には同窓会が始まる。彼女は来るのだろうか。今何をやっているのだろうか。

彼女に会いたくて、僕は出席を決めた。

あの日公園で酷く傷つけてしまった事を謝りたい。彼女はそのときのことを覚えていないかもしれない。迷惑がられるだけかもしれない。

い。ただ、僕は謝らないといけない。そして伝えないといけない。いつか彼女が言った、傷は元通りになるという言葉。僕はそれを笑顔で否定しよう。ただ元通りになるだけじゃない。傷を負ったところは強く、丈夫になっっている。僕の右手も、きつと、僕の心も。

あの日、僕は彼女を傷つけて、僕も傷ついた。そんな傷が今の僕を作って、支えてくれている。小学生の時に彼女に出会わなければ、

中学生の時の経験がなければ、今の僕はいない。
僕の右手が、中学時代の怪我を乗り越えて強くなったのなら、きっとそれよりも痛い思いをした僕の心はとて強く、そして優しくなっている。

日は沈み、外は夜になった。そろそろ出かけよう。
今更「好きだ」なんて言うつもりはない。

「ごめん」とは言いたい。
でも、一番伝えたい言葉は「ありがとう」だ。
生きているだけで傷は増える。それを乗り越えるたびに強くなる。
決して元通りにはならない。体も、心も。

ドアを閉めて顔を上げ歩き出す。
空にはいつかのような、綺麗な満月がかかっていた。

今日（後書き）

BUMP OF CHICKENの曲に「かさぶたぶたぶ」というのがあります。その中で『傷は治るんだ きつともとどおり』という歌詞を聞いた時、「そんなわけねえだろ！」と思ったのがこの話を書き始めるきっかけでした。

傷ついて痛い思いをして、はい元通りプラマイゼロって言われても納得できません。その分強くなっていないと。痛い思いをした分、強くなっていなと。辛い思いをした分、幸せにならないとダメだ、みたいな感じです。

最後まで読んでくださりありがとうございました。感想等あればお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4407d/>

傷は元通りにならない

2011年1月26日02時57分発行